

〔農産物安全確保調査分析事業（本庁所管事業）〕
キュウリ樽栽培における栽植密度・側枝摘心位置の影響

野口 貴・沼尻勝人^a・荒木俊光・海保富士男
(商品開発科) ^a現島しょ農林水産総合センター三宅事業所

【要 約】収量性から、樽栽培における栽植密度は2株植えよりも3株植えが有利で、「ズバリ163」の側枝については1節止めよりも2節止めがやや優位である。

【目 的】

簡易に隔離栽培を行うことのできる樽栽培システムをキュウリ栽培へ適用するため、半促成栽培における栽植密度、側枝の摘心位置を検討し、併せて、抑制栽培における基肥の種類が生育に及ぼす影響を明らかにする。

【方 法】

- 1) 半促成栽培：品種「ズバリ163，夏すずみ」を2007年3月16日に播種し，3月23日に楽苗システムへ移植した。樽栽培では4月5日に定植し，土耕栽培（対照）では4月10日とした。樽栽培は樽ピッチを210×90cm，樽あたり2株植え（1058株/10a）または3株植え（1587株/10a）とした。土耕栽培では畝間180cm，株間60cmの2条植え（1852株/10a）とし，施肥量は慣行に準じ，追肥には液肥を用いた。側枝は「ズバリ163」で1または2節止め，「夏すずみ」では2節止めとした。主枝は一律25節止めとした。
- 2) 抑制栽培：「夏すずみ」を8月14日に播種し，上記に準じて8月21日に移植，8月31日に定植した。栽植密度は樽あたり株数を2または3本とし，基肥はマニュアルに基づく標準仕様（1株あたり窒素成分量で14.5g），またはIB化成S1号（同10g）とした。

【成果の概要】

- 1) 株あたり収穫本数は，「ズバリ163，夏すずみ」ともに，樽栽培2株植えで多く，土耕で少なかった（図1，2）。一方，10aあたり可販果数は，土耕で多く，樽栽培2株植えが少なかった。側枝の摘心位置では2節止めでやや多い傾向にあった。
- 2) 「ズバリ163」の可販果収量は，土耕2節止め，および樽栽培3株植え2節止めが多かった（図3）。樽栽培では両品種とも収穫期前半の収量が少なかった（図4）。
- 3) 下物の内訳は，「ズバリ163」では各区とも曲がり果が70～80%であった（図5）。「夏すずみ」においては，樽栽培3株植えで尻細果が比較的多く発生した（図6）。
- 4) 主枝着果率は，側枝の摘心位置に影響されず，ほぼ同率で減少した（図7）。
- 5) 収穫期の可販果率は，土耕では緩やかに減少する傾向にあったが，樽栽培，特に3株植えでは上下の変動が顕著であった（図8）。樽栽培では肥効が不安定と考えられた。
- 6) 抑制栽培においても株あたり収穫本数は2株植えが多かったが，10aあたり可販果数は3株植えで多くなった（図9）。基肥では標準仕様の方が可販果数が多かった（図10）。IB化成区は収穫期前半の収量が少なかった。
- 7) 以上の結果から，樽栽培における栽植密度は3株植えが適正で，「ズバリ163」の側枝については2節止めが適する。基肥は標準仕様で土耕と同程度の収量が得られるが，引き続き着果が安定するよう施肥方法を検討する。

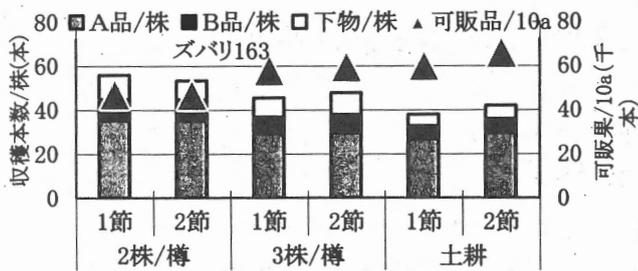


図1「ズバリ163」における樽栽培の栽植密度・側枝の摘心位置と収穫本数

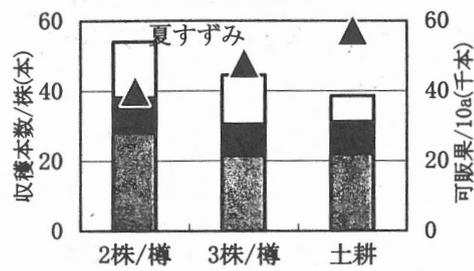


図2「夏すずみ」における樽栽培栽植密度と収穫本数

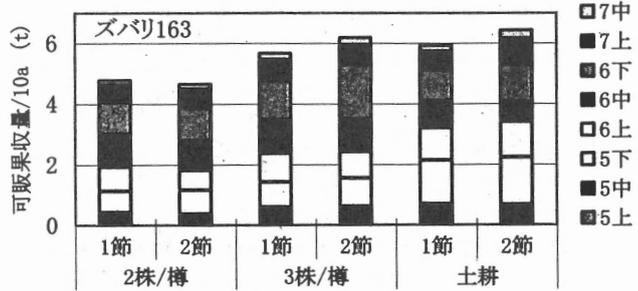


図3「ズバリ163」における樽栽培の栽植密度・側枝の摘心位置と時期別収量

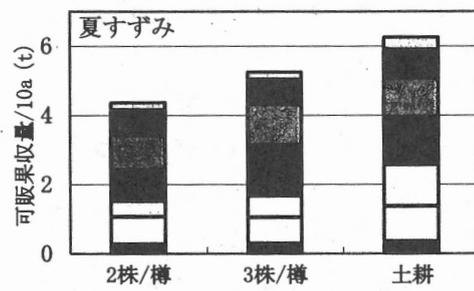


図4「夏すずみ」における樽栽培栽植密度と時期別収量

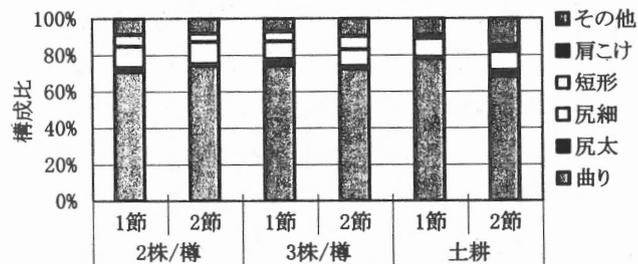


図5「ズバリ163」における下物の内訳

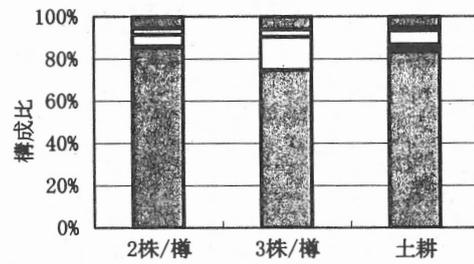


図6「夏すずみ」における下物の内訳

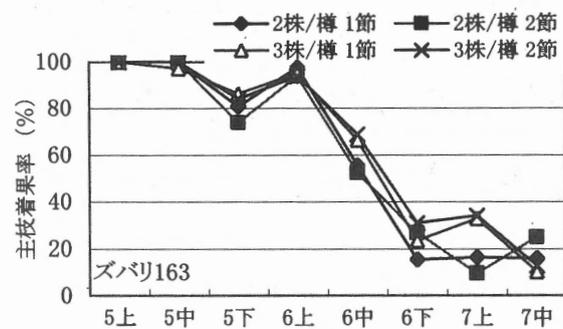


図7「ズバリ163」における側枝の摘心位置と主茎着果率の関係

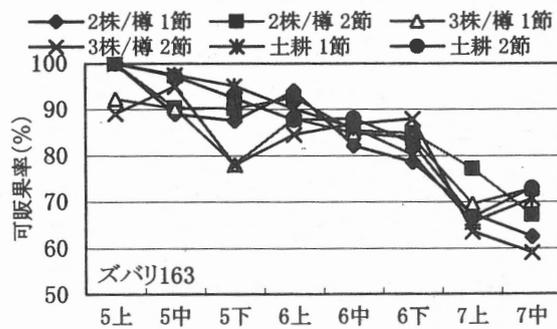


図8「ズバリ163」における可販果率の推移

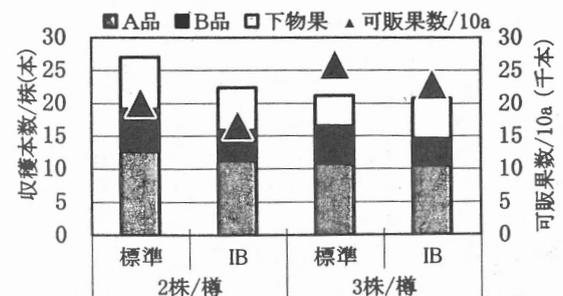


図9「夏すずみ」における栽植密度・基肥の種類と収穫本数

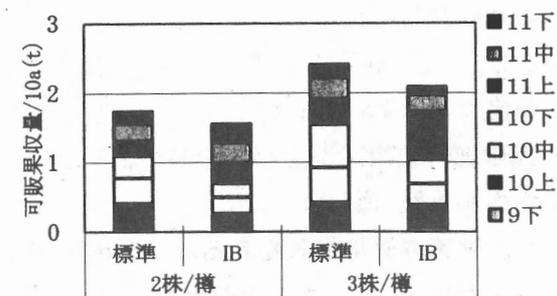


図10「夏すずみ」における栽植密度・基肥の種類と時期別収量